

第23回地域医療連携交流会を開催しました

当院では、地域の医療機関の皆様と一堂に会し、交流を深める機会を大切にしています。今回の交流会には、**130施設、238名**の皆様にご参加いただきました。来年度も皆様のご参加を心よりお待ちしております。

「当院は明治41年(1908年)の創立以来、地域住民の皆様、そして地域医療を支える多くの医療機関の皆様とともに歩んでまいりました。118年にわたる当院の歴史は、まさに地域の先生方との連携の歴史であります。長年にわたり当院を支えていただいている皆様に、改めて心より感謝申し上げます。」これは、当院院長の挨拶の一節です。

当院は、引き続き播磨姫路医療圏の基幹病院として、安全で質の高い医療の提供に努めてまいります。そしてこれまで支えてくださった皆様への感謝を胸に、これからも地域の皆様から「選んでいただける日赤さん」を目指し、職員一同より一層努力してまいります。



院長挨拶



講演会 大阪大学 島菌 洋介 先生
「文化人類学と臨床医学が交わる」ところ」



交流会

食道がんに対する最新治療「テロメライシン」による治療を開始

当院では、2026年10月より食道がんに対する新たな治療法として、腫瘍溶解ウイルス製剤「テロメライシン(一般名:スラタデノツレブ)」による治療を開始しました。

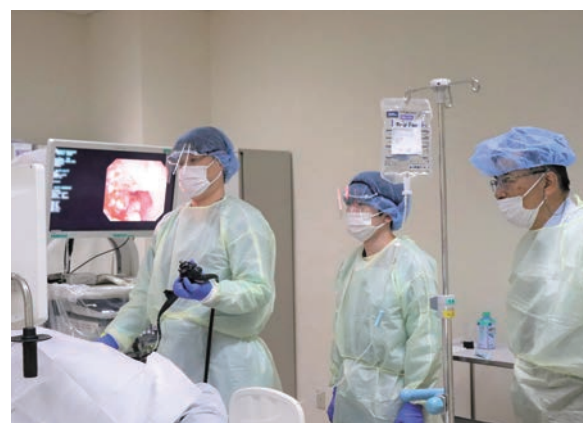
テロメライシンは、がん細胞の中で選択的に増殖するよう遺伝子改変されたアデノウイルスを利用した製剤で、上部消化管内視鏡を用いて食道の腫瘍に直接投与することで、ウイルスががん細胞内で増殖し、がん細胞を破壊することが期待されています。

また、放射線療法と併用して治療を行うことが特徴です。

現在対象となる患者さんは、「根治切除および化学放射線療法の適応とならない食道がん」の患者さんです。

テロメライシンによる治療は、手術や化学放射線療法とは異なる新たな選択肢です。

当院では、外科・内科・放射線科などが連携し、患者さん一人ひとりの状態に応じた安全で良質な医療を提供できるよう努めてまいります。



消化管外科部長 信久 徹治



日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

姫路赤十字病院

〒670-8540 兵庫県姫路市下手野1-12-1

電話 079(294)2251代

URL: <https://himeji.jrc.or.jp/>



ホームページ

姫路赤十字病院だより No.54

発行日 令和8年10月 発行 姫路赤十字病院
発行責任者 院長 岡田 裕之
編集責任者 広報推進室長 五百蔵 智明

姫路赤十字病院だより No.54

多職種の連携で命をつなぐ
—がん薬物療法を支える化学療法センター—



化学療法センター長
兼 腫瘍内科部長

大北 仁裕

Okita Yoshihiro

化学療法副センター長
兼 第二呼吸器内科副部長

狩野 裕久

Kano Hirohisa

化学療法副センター長
兼 第二内科副部長

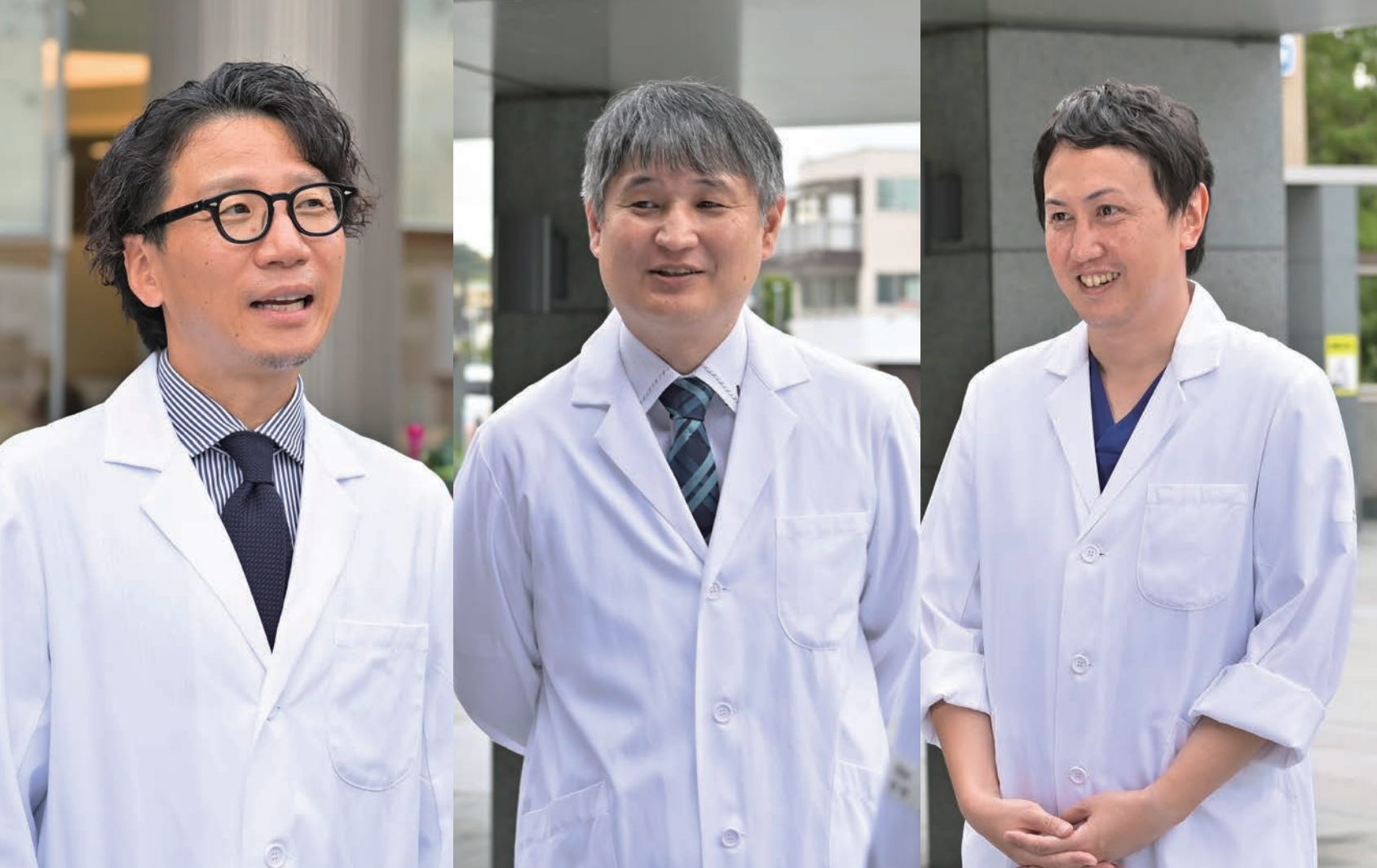
高島 健司

Takashima Kenji



日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

姫路赤十字病院



化学療法センター長
兼 腫瘍内科部長

大北 仁裕
Okita Yoshihiro

化学療法副センター長
兼 第二内科副部長

高島 健司
Takashima Kenji

化学療法副センター長
兼 第二呼吸器内科副部長

狩野 裕久
Kano Hirohisa

多職種が連携して質の高いがん薬物療法とサポートを提供します

私たちは、患者さんが住み慣れた地域で、その人らしい日常生活を送りながら安心して治療を継続できるよう、多職種が連携して質の高いがん薬物療法とサポートを提供してまいります。

当院は国指定の地域がん診療連携拠点病院として、中播磨地域のがん診療の中核を担う施設のひとつです。

近年、がん薬物療法における支持療法の進歩により、入院することなく通院で普段の生活や仕事を続けながら治療を受けられるようになっています。当院では2006年6月に6床で通院治療を開始し、同年12月に「外来化学療法室」12床を開設しました。その後、外来化学療法の増加に伴い、2016年9月に20床、2018年11月には31床へ増床し、名称を「化学療法センター」へと変更いたしました。現在、第一化学療法室はベッド8床、リクライニングチェア16床、第二化学療法室はリクライニングチェア7床での運用となっています。

「近年のがん薬物療法の発展と当院の化学療法センター」

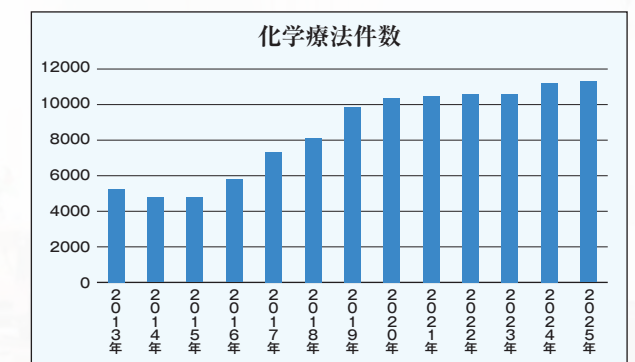
●進歩を続けるがん薬物療法

1990年代後半まで、がん薬物療法は主に「殺細胞性抗がん剤」を用い、吐き気や全身倦怠感、脱毛、骨髄抑制（血球減少）といった強い副作用が伴うものが主流でした。しかし、1990年代後半以降、がんの増殖や転移に関わる特定の標的を攻撃する「分子標的薬」が登場しました。さらに2014年には「免疫チェックポイント阻害薬」が登場し、現在では多くの癌腫で、単独療法や従来の殺細胞性抗がん剤・免疫療法同士の併用療法などが行われています。また、分子標的薬に抗がん剤を結合させた「抗体薬物複合体」が2010年代中期に登場したほか、近年では2つの標的を同時に狙う「二重抗体薬」の開発が進むなど、治療薬の開発は現在も盛んに行われています。

●専門性と実績を誇る当院の化学療法センター

こうした薬物療法の劇的な進歩や支持療法の充実に伴い、入院から通院へ、普段の生活や仕事を続けながら治療を受けるスタイルが主流となっています。当院でも2006年の

開設以降、化学療法件数は増加の一途をたどっており、現在は地域屈指の施行件数を誇る施設となりました。日々高度化・多様化する最先端の治療に対し、豊富な経験と高い専門性を持つ習熟した多職種スタッフが連携し、安全できめ細やかな医療体制のもとで化学療法センターを運営しています。私たちは、患者さんが住み慣れた地域でその人らしい日常を送りながら、安心して治療を継続できるよう全力でサポートしてまいります。



多職種での治療サポート

外来化学療法センターでは、医師や看護師だけでなく、薬剤師、歯科医師、歯科衛生士など、多くの職種が協力しながら、患者さんの化学療法をサポートしています。今回は、その中から当院ならではの2つの取り組みをご紹介します。

1つ目は「薬剤師面談」です。医師の診察前や検査結果待ちの時間を利用して、薬剤師による面談を行っています。薬剤師ならではの視点から患者さんのお話を伺うことで、副作用の早期発見や対処法の説明、内服薬の管理に関するアドバイスなどを行っています。また、面談で得られた情報を医師と共有し、患者さん一人ひとりの状況に応じた治療やサポートにつなげています。さらに患者さんの希望があれば、かかりつけ薬局の薬剤師にも化学療法の情報や治療状況などを共有することもできます。今後は、より多くの患者さんに薬剤師面談を受けていただけるよう、体制を整えていきたいと考えています。

2つ目は「歯科医師・歯科衛生士による診察・口腔ケア」です。口内炎などの口腔内の症状は、化学療法に伴って生じる頻度の高い副作用の一つです。また、骨転移のある患者さんの中には、ランマークやゾメタなどといった骨修飾薬を使用されている方もおられます。これらの薬剤では、口腔内感染症や顎骨壊死などの副作用を生じることがあります。そして、虫歯や歯肉炎などの口腔内の感染症が、全身の感染症につながることもあります。特に化学療法中は免疫機能が低下しており、感染症が重症化する可能性もあるため、治療中の口腔内を良好な状態に保つことが大切です。そこで、化学療法や骨修飾薬に伴う口腔内の副作用や口腔内感染症を早期に発見し、適切に対応するため、歯科医師・歯科衛生士による診察や口腔ケアを定期的に行っています。

このように、姫路赤十字病院外来化学療法センターでは、さまざまな職種のスタッフがそれぞれの専門性を生かして協働しています。患者さん一人ひとりが安心して、安全に化学療法を受けられるよう、これからも多職種で支えていきます。

化学療法センター長
兼 腫瘍内科部長
大北 仁裕

化学療法副センター長
兼 第二内科副部長
高島 健司

化学療法副センター長
兼 第二呼吸器内科副部長
狩野 裕久